［二〇〇三年度大会シンポジウム］特集　思想を語るメディア――近世日本を例として

媒介者（メディア）と地域社会――コメント――

小林　准士

高橋報告では、思想の伝播に果たす媒介者の役割の重要性が指摘された。とりわけ伊勢にあって染型紙の販売を業とし、行商を通じて仙台・南部地域との関係を形成していた沖安海という本居大平門下の国学者に注目された。沖安海は行商先の仙台・南部地域に国学を普及する活動も行っており、本居大平という師と地方の門人を媒介する役割を果たしていたことが指摘されたのである。また、古代における陸奥の産金地を考証したり、門人による地域の歴史考証に協力したりするなど、形成された学問の享受者との関係を前提に、沖安海自身も学問の中心軸を変化させていったことなどが指摘された。

一方、若尾報告では、少数の知識人・思想家の思想だけでなく、民衆の意識（広義の思想）も視野に入れた思想史を構想すべきことがまず述べられた。その上で、「太平記読み」や「軍書」などの出版物の普及を通じた政治常識の形成が主張された。またその際には、特に出版された書物による知が在村・在町の知識人・読書人らによりオーラルなメディアを通じて一般民衆にまで普及するという過程を想定し、その重要性を主張された。

とりあえず、以上の二報告の視点を今後どのように発展させたらよいかという観点からコメントしたい。

まず高橋報告を受けて、沖安海のような媒介者を私なりに位置づけるところから始めよう。媒介者をさらに踏み込んで位置づけると、地域の社会的・文化的状況と、

より一般的な文化的・思想的動向を媒介する存在と言えるのではないか。また、沖安海自身やその門人により地域の歴史考証が進められていった点を踏まえると、彼ら媒介者は文化的中心地の動向を地方にまで及ぼす一方、地域の状況や動向をより一般的な文化的・思想的動向に連結させつつ反映する役割を果たしたとも考えられる。

媒介者という場合、この後者の動きも重要なのではないか。私自身の把握している事例を挙げよう。本居宣長の『玉勝間』九巻に「石見国なるしづの岩屋」という文章が載る。この「しづの岩屋」は石見国邑智郡岩屋村にあるとされ、「大穴牟遅少彦名二神の、かくれ給ひし岩屋也」との「伝承」が報告されている。これは、『万葉集』三巻に載る「大汝小彦名乃将志都乃石室者幾代将経」という生石村主真人歌に出てくる「志都乃石室」の比定地考証と絡めて、石見浜田藩儒の小篠敏が師である宣長に報告したのであった。

事実、「静窟図」等、関係の図面複数が本居宣長記念館に残り、また小篠敏は宣長に書状で現地調査の報告をしていることが分かる。

先々代共巡郷被致候事無之候処、志都窟並八頭蛇之事なと吟味被致度、巡郷被致候、右八頭蛇先年見申候人に被逢候而委曲被尋候処、兼而絵図にて出し申候より殊之外大なる物にて胴之処は三抱も四抱も有之、長さは相知不申候、八頭之一つ分が二尺廻りも有之候様に相聞申候、先達而被仰下候には、古事記伝神代之処へ御記し可被成由被仰下候、今一応吟味可申上候間、先書記候事御見合可被成候、（本居宣長宛小篠敏書状、本居宣長記念館蔵）

この書状に見られるように、小篠敏は石見国邑智郡岩屋村を「志都乃石室」の比定地としたうえで、浜田藩主とともに現地を調査していた。そしてこの付近で八頭の蛇を見たという、村人の話を宣長に報告し、いったんは『古事記伝』への記載を依頼していたことが分かる。

沖安海と小篠敏は身分的立場が異なるものの、地域の門人と師を仲介する役割を担う点では共通していた。そうした小篠敏による現地住民の聞き取りの結果が、宣長の著書に反映されるという回路があったのである。ちなみに、この「志都乃石室」の考証は平田篤胤により『古史伝』十九之巻でも行われているが、篤胤門人であった石見国邇摩郡湯里村霹靂神社神職竹内正業の説を採用し石見国安濃郡静間村を比定地としている。しかも篤胤の場合、国造りの神話と関連づけられ意味合いが大きくなっていた。このような比定地の増加の背景には、神代の古跡を地元に見出していこうとする地域社会側の志向

の発生を指摘できよう。

このように、少なくとも国学の展開に際しては、地域の社会的・文化的状況と、より一般的な文化的・思想的動向との相互連関の回路が形成されつつあった。したがって、媒介者への視点をより意味のあるものにしていくためには、地域の社会的・文化的状況における位置と、全般的な文化的・思想的動向における位置の双方を分析することが必要であろう。

次に若尾報告であるが、注目されるのは、書物を通じ普及した知がオーラルなメディアと結びつくことでより広がりをみせ、民衆まで含めた政治常識の形成に寄与していくという主張である。しかし、この主張の説得力を高めるためには、具体的事例の発掘がまだまだ必要であろう。

そのためには、オーラルなメディアによる回路について視野をもう少し広げて検討してく必要があろう。もちろん、河内屋可正のような在村・在町の知識人・読書人による夜話も重要であるが、そもそも「太平記読」もその一員であった講釈師や説教僧などが、どのくらい、どういった場所で、活動していたのかを調査する作業は今後欠かせないのではないだろうか。

尤もこの点自体は、若尾氏も気にされていることであるが、これまで研究の蓄積が乏しいこともあり、しっかりとした位置づけができない段階にある。しかし、引野亨輔「近世後期の神道講談と庶民教化」（『日本宗教文化史研究』第六巻第二号、二〇〇二年）が紹介する事例によると、安芸や備後では文化年間ごろ、地方小社を講釈師たちが訪れて一般庶民に対し神道講談を頻繁に行っていた。同様の事例は、私が見る限りでも、出雲や石見で確認でき、調査次第で広範な地域で見出し得るはずである。

近世後期になると、比較的大きな寺社だけでなく、一般の村にある寺社などでも、祭礼・法会などの際に芸能、相撲や富籤の興行がなされる事例が多くなる。こうした場や機会に、神道講談、僧侶による説教や心学講釈が開催されることもあった。こうした動向が地域の文化的あるいは思想的状況にどのような影響を及ぼしていったのかを総体として理解していくことが求められるのである。

というのも、こうした状況が進展すれば、読者がますます多くの書物から影響を受け、個々の書物の内容を相対化しつつ享受していったと考えられるように、書物に触れる機会が比較的限られた聴衆の場合も、個々のオーラル・メディアの影響を相対化しつつ、独自の仕方で享受するようになるという事態が想定される。読者・聴衆に視点をすえた新しい思想史を構想するのならば、特に

近世後期以降に顕著となる地域社会レベルにおける諸思想・諸教説の競合的な状況を踏まえる必要があろう。

最後に、本来ならば、福田報告についてもコメントするべきところであるが、時間的問題と、事前に用意してきた素材との関係で、シンポ当日はほとんどできなかった。福田報告は史料論を取り扱いながら、読者あるいは思想の受け手の視点からする研究手法に正面から取り組んだもので、興味深いものであった。しかし、当日コメントできなかったものを紙面で述べるのも気が引けるので差し控えることにしたい。

（島根大学助教授）